

首輪をつけられた夜から、俺は潜入捜査官の所有物になった

目次

第1話 檻の中の獲物

2

第2話 飼い主の刻印
20

第3話 膝をつけ
39

第4話 身体の開花
54

第5話 貫かれる夜
66

第6話 見世物
84

第7話 反転
100

第8話 裏切りの夜
116

第9話 見せしめ
130

第10話 鎖の檻
145

第1話 檻の中の獲物

コンクリートの床が頬に冷たい。
冴島怜司は薄れゆく意識の中で、自分がどこにいるのかを理解した。
地下牢だ。

「起きろ、犬が」

革靴の先が脇腹に食い込む。
冴島は声を殺して身体を起こした。
視界がぼやける。殴られた頭がまだ痛む。

「よう、冴島。いや、警視庁組織犯罪対策部の冴島怜司"巡查部長"、だったか」

見覚えのある顔だった。
黒龍会の若頭補佐、神谷。
潜入任務中、最も信頼を得ていたはずの男。

「……誰に売られた」

「さあな。上からの指示だ」

神谷は煙草に火をつけ、煙を吐いた。

「お前の上司、なかなかいい値段で情報を買ってくれたよ」

胃の底が冷える。
裏切り者は、組織の中ではなく、警察の中にいた。

「殺すのか」

「まさか。潜入捜査官なんて珍しいもん、すぐ殺すわけねえだろ」

神谷は笑った。
その笑みが、冴島の背筋を凍らせた。

「お前にはこれから、"仕事"をしてもらう。組のためにな」

神谷が顎で示した先。
牢の奥に、もう一人の人影があった。

壁に背をつけて座り込んでいる。
汚れたワイシャツ。緩んだネクタイ。
まだ若い。二十代前半か。
端正な顔立ちだが、目の下に濃い隈がある。

「そいつは瀬尾奏汰。親父の会社が潰れて、借金のカタに売られてきた」

瀬尾と呼ばれた男が顔を上げた。
怯えと、それを隠そうとする虚勢。
冴島はその目に見覚えがあった。
追い詰められた人間特有の、ぎらついた光。

「で、お前に預ける。好きに使え」

「……どういう意味だ」

「言葉通りだよ。舐ける、犯せ、壊せ。なんでもいい」

神谷は煙草を床に捨て、踏み消した。

「お前が"使える"かどうか、見せてもらう。拒否権はねえ」

鉄格子の扉が閉まる音が、地下に響いた。

沈黙が落ちた。
冴島は壁に背をつけ、呼吸を整えた。
肋骨が軋む。おそらく二、三本はひびが入っている。

「……あんた」

瀬尾の声だった。
低く、掠れている。

「刑事なんだろ。助けてくれるのか」

冴島は答えなかった。
今の状況で、何を約束できる。

「おい、聞いてんのか」

「黙れ」

短く言い放つと、瀬尾の顔が歪んだ。
怒りと、失望。

「なんだよ、偉そうに。あんただって捕まってんじゃねえか」

「だから黙れと言っている」

冴島は目を閉じた。
考える。状況を整理しろ。
逃げる手段。連絡を取る方法。生き延びる術。

だが思考は纏まらない。
裏切られた。上司に。組織に。
何年もかけて築いた潜入任務が、すべて無駄になった。

「……ふざけんな」

瀬尾が立ち上がった。
よろめきながら、冴島に詰め寄る。

「俺はな、こんなところで死ぬつもりねえんだよ。あんたが刑事なら、なんとかしろよ」

「できると思うか、この状況で」

「知るかよ！」

瀬尾が冴島の胸倉を掴んだ。
力は弱い。まともに食事を与えられていないのだろう。

だが目だけは、まだ死んでいなかった。

「俺は……俺は、こんなところで終わりたくねえんだ……」

声が震えている。

虚勢の下に、恐怖がある。

当たり前だ。こんな場所に売られてきて、平気でいられる人間がいるわけがない。

冴島は瀬尾の手首を掴み、引き剥がした。

「座れ。体力を温存しろ」

「は？」

「今は動くな。様子を見る」

瀬尾は数秒、冴島を睨んでいた。

やがて、力が抜けたように座り込む。

「……あんた、名前は」

「冴島」

「冴島、ね」

瀬尾は膝を抱えた。

「俺は瀬尾奏汰。二十三。つい三ヶ月前まで、普通のサラリーマンだった」

「聞いてない」

「聞けよ。どうせ暇だろ」

冴島は答えなかった。

だが瀬尾は構わず続けた。

「親父が会社潰してな。借金が三億。連帯保証人になってた俺が、そのまま売られた」

「……三億か」

「笑えるだろ。たった三億で、人生終わりだ」

自嘲の笑み。

冴島はその顔を見て、少しだけ考えを変えた。

この男は、まだ折れていない。

プライドが高く、素直になれない。

だが芯は強い。

使えるかもしれない。

いや、使うしかない。

生き延びるために。

翌日。

鉄格子の向こうに、神谷が現れた。

「よう、仲良くやってるか」

冴島は黙って立ち上がった。

瀬尾は壁際で身を固くしている。

「さて、冴島。お前の"仕事"の時間だ」

「何をさせる気だ」

「言っただろ。そいつを賄けろ」

神谷が顎で瀬尾を示す。

「まずは検査だ。商品の状態を確認しろ」

「……検査」

「身体検査だよ。隅々までな」

冴島の背後で、瀬尾が息を呑む音がした。

「拒否したらどうなる」

「お前も、そいつも、ここで終わりだ。簡単だろ？」

神谷は笑っている。

この男は本気だ。

拒否すれば、二人とも殺される。

冴島は振り返った。

瀬尾が青ざめた顔でこちらを見ている。

恐怖。怒り。そして、微かな懇願。

選択肢はない。

「……分かった」

「よし。じゃあ、始めろ」

神谷が鉄格子の外から見物する体勢を取った。

冴島は瀬尾に近づいた。

「立て」

「……っ」

瀬尾が後ずさる。

壁に背がついて、それ以上逃げられない。

「触んな……来るな……！」

「黙って従え。でなければ死ぬ」

冴島は瀬尾の腕を掴んだ。

抵抗する力を、容易くねじ伏せる。

「離せっ……！ ふざけんな……！」

「暴れるな」

低く、冷たく言い放つ。

瀬尾の動きが止まった。

冴島の目を見て、何かを悟ったのかもしれない。

これは演技ではない。

本気だ、と。

「……っ、くそ……」

瀬尾が唇を噛んだ。

屈辱に顔を歪めながら、抵抗を止める。

冴島は瀬尾のワイシャツに手をかけた。

ボタンを一つずつ外していく。

白い肌が露わになる。

華奢だが、骨格はしっかりしている。

肋骨が浮いているのは、ここ数日まともに食べていないせいだろう。

「服を脱げ。全部だ」

「……っ」

瀬尾が睨んでくる。

だが逆らえないと分かっているのか、震える手でベルトを外し始めた。

スラックスが落ちる。

下着だけの姿になった瀬尾が、腕で身体を抱いた。

「それも」

「……お前、本当にやるのかよ」

「やらなければ死ぬと言っただろう」

冴島は感情を殺して言った。

瀬尾が唇を震わせながら、下着に手をかける。

布が落ちた。

全裸の瀬尾が、羞恥と屈辱で顔を真っ赤にしながら立っている。

「壁に手をつけ。尻を突き出せ」

「は……？ ふざけ……」

「検査だと言っただろう。隅々まで、だ」

冴島の声は冷たい。

瀬尾が一瞬、泣きそうな顔をした。

だがすぐに唇を噛み締め、言われた通りに壁に手をついた。

「……殺してやる。いつか絶対、殺してやるからな……」

「好きにしろ」

冴島は瀬尾の後ろに立った。

形の良い尻が目前にある。

白く、滑らかで、まだ誰にも触れていないことが分かる。

両手で尻の肉を掴む。

「っ……！」

瀬尾が身を強張らせた。

冴島は構わず、その双丘を左右に割り開いた。

薄桃色の穴が露わになる。

きつく閉じた、まだ何も知らない場所。

「検査を始める」

「ま、待っ……そこは……っ！」

冴島の指が、その入り口に触れた。

ひやりとした感触に、瀬尾の全身が震えた。
男の指が、誰にも触れさせたことのない場所に触れている。
その事実だけで、頭が真っ白になりそうだった。

「やめ……っ、そこ触んな……！」

「動くな」

冴島は淡々と言いながら、指先で窄まりを撫でた。
乾いた皮膚が、敏感な粘膜の入り口を擦る。
きゅっと閉じた穴が、触れられるたびにひくりと反応する。

「ひっ……あ……っ」

瀬尾が声を漏らす。
恐怖か、それとも別の何かか。
冴島には判断がつかない。

だが観察は続けた。
穴の周囲の皮膚は薄く、微かにピンクがかっている。
産毛すら生えていない、綺麗な肌。
指で軽く押すと、抵抗しながらも僅かに窪む。

「ふっ……んっ……やめろって……」

瀬尾の太ももが震えている。
尻の筋肉が硬く強張り、侵入を拒否しようとしている。
だがそれも、時間の問題だった。

「神谷」

冴島が振り返らずに言った。

「潤滑剤がいる」

「お、さすが分かってんな」

神谷が鉄格子の隙間から小瓶を投げてよこした。
冴島はそれを受け取り、蓋を開けた。
無色透明の液体。ぬるりとした感触。
嗅ぐと、微かに甘い香りがする。

指に液体をたっぷり取る。
とろりとした粘度が、指の間から垂れそうになる。
そして再び、瀬尾の尻に手を伸ばした。

冷たい液体が窄まりに触れた瞬間、瀬尾がびくりと跳ねた。

「つめ……っ」

「我慢しろ」

冴島は液体を穴の周囲にたっぷり塗り込んだ。
ぬるぬるとした感触が、閉じた入り口を濡らしていく。
透明な液体が尻の谷間を伝い、睾丸の方へと流れ落ちる。

「きも……っ、気持ち悪い……っ」

瀬尾が身を振る。
だが冴島の手は離れない。
執拗に、丁寧に、その場所を濡らし続ける。

「力を抜け」

「無理に決まってるだろ……！」

「抜かなければ痛い。それだけだ」

冴島は容赦なく、濡れた指先を窄まりに押し当てた。
ぬるりとした指の腹が、きつく閉じた入り口をこじ開けようとする。

瀬尾の身体が本能的に拒否し、穴がぎゅっと締まる。

だが冴島は止まらなかった。
ゆっくりと、だが確実に、その中へ侵入していく。

「あぐっ……！ 痛っ……やめ……っ！」

瀬尾が悲鳴を上げた。
指先が括約筋を押し広げ、体内へと沈んでいく。
ずぶり、と肉が裂けるような感覚。

腸壁が指を締め付ける。
熱く、狭く、抵抗するように蠢いている。
内壁のひだが、異物を押し出そうと脈打つ。

「力を抜けと言った」

「抜けるわけ……ねえだろ……っ！」

涙声だった。
汗が背中を伝い、腰のくびれを濡らしている。
瀬尾の指が壁を引っ掻き、爪が白くなるほど力が入っている。

冴島は一度指を止め、瀬尾が呼吸を整えるのを待った。
体内で指を動かすと、内壁がぐにゅりと形を変える。
熱い肉に包まれた感触。まだ誰にも犯されていない、処女の腸。

数秒後、わずかに力が緩む。
呼吸が深くなり、括約筋の締め付けが僅かに弱まった。
その隙を逃さず、指を第二関節まで押し込んだ。

「ひいっ……！ あっ、あっ……！」

瀬尾の腰が跳ねた。
内壁が痙攣するように指を絞る。
ずるり、と腸液が指に絡みつ়く感触があった。

瀬尾の膝が震えている。

壁についた手が滑りそうになるのを、必死に堪えている。

「中を確認する」

「なに、を……っ」

冴島は指を曲げ、腸壁を探った。
前立腺の位置を確かめる。
医学的な知識がある。どこを押せば、どうなるか。

指を少し手前に引き、角度を変える。
腸壁の上側、恥骨の裏あたりを丁寧に探っていく。
ぐにぐにと柔らかい肉を押し分け、目的の場所を探す。

そして、指先がわずかに膨らんだ場所に触れた。
くるみほどの大きさの、弾力のある塊。
周囲の組織とは明らかに違う感触。

「っ！？」

瀬尾の身体が跳ねた。
これまでとは明らかに違う反応。
全身に電流が走ったように、背中が弓なりに反る。

「ここか」

「な、なに……っ、今の……っ」

瀬尾の声が震えている。
何が起きたのか、本人にも分かっていない。
ただ、今までに感じたことのない衝撃が身体を貫いた。

冴島はその場所を、ゆっくりと押し込むように撫でた。
指の腹で、前立腺の膨らみを圧迫する。
ぐりっ、と押し込み、そのまま円を描くように回す。

「ひあっ……！ やっ、やめ……っ、なにそれ……っ！」

瀬尾の声が裏返る。

腰が勝手に逃げようとするのを、冴島は空いた手で腰骨を鷲掴みにして固定した。

骨ばった腰が、大きな手のひらにすっぽりと収まる。

「動くな」

「無理っ……！　なんか、変……っ、おかしい……っ、やめろ……！」

前立腺を指の腹で円を描くように刺激する。

押して、擦って、時には指先でつんつんと突く。

そのたびに瀬尾の身体がびくびくと跳ね、甘い声が漏れる。

瀬尾の脚が震え、腰が小刻みに揺れ始めた。

自分の意思とは無関係に、尻が冴島の指を追いかけるように動く。

もっと、もっとと求めるように。

「あっ、あっ、あっ……！　なに、これ……っ、やだ……っ！」

声が甘く濁り始めている。

さっきまでの怒りや抵抗が、快感に塗り替えられていく。

本人は気づいていないだろう。

だが身体は正直だった。

冴島は視線を下げた。

瀬尾の股間。

さっきまで完全に萎えていたそれが、少しずつ硬さを増している。

ふにやりとしていたペニスが、徐々に角度を上げ始めた。

「反応している」

「は……？　嘘……っ、そんなわけ……っ」

瀬尾が自分の股間を見下ろし、絶句した。

半勃ちの性器が、裏切りの証拠のようにそこにあった。

皮の中から亀頭が顔を覗かせ、先端がてらてらと光っている。

「違……っ、これは……っ」

瀬尾の目が潤む。

屈辱と混乱。

頭では拒んでいるのに、下半身だけが別の生き物のように反応している。

それを目の当たりにして、言葉を失っている。

「お前の肉体は、もうこれを快感だと認識している」

冴島は指を動かし続けた。

前立腺を押し、擦り、時には軽く弾く。

ぐりっ、ぐりっと規則的なリズムで刺激を与える。

そのたびに瀬尾の身体が跳ね、堪えきれない声が漏れる。

「あひっ……！ やっ、やめっ……もう、やめてくれ……！」

「検査はまだ終わっていない」

「嘘だ……っ、こんなの検査じゃ……っ、あああっ！」

冴島は指を二本に増やした。

人差し指と中指を揃え、狭い穴に押し込んでいく。

一本でも精一杯だった括約筋が、二本の指に無理やり押し広げられる。

「いたっ……！ 痛い……っ、裂ける……っ！」

「慣れる」

冴島は容赦なく指を進めた。

ずぶっ、ずぶっと肉を押し分ける感触。

内壁がぎちぎちと指を締め付け、必死に押し出そうとする。

だがローションの滑りが良く、抵抗を許さない。

二本の指が第二関節まで埋まる。

冴島は指を広げ、内壁を左右に押し広げた。

ぬちゃ、と肉が開く音。

きつく閉じていた穴が、二本の指に犯されて強制的に拡張されていく。

ピンク色の粘膜が、指に押されて外に覗く。

「あっ、ひっ、ううっ……！」

瀬尾が泣いていた。

涙が頬を伝い、顎から滴り落ちる。

だが声には、もう純粋な怒りや恐怖だけではない何かが混じっている。

冴島は二本の指で前立腺を挟み込んだ。

ぎゅっと圧迫し、そのまま指を前後に動かす。

前立腺が指に擦られ、押され、揉みしだかれる。

「ひいっ……！ あっ、あっ、あっ……！」

瀬尾の膝が完全に笑い始めた。

壁に縋りつくようにして、かろうじて立っている状態。

太ももの内側が痙攣し、全身が小刻みに震えている。

「あっ、ひっ、あっ……！　なんで……っ、気持ちいいわけ、ないのに……っ」

涙声だった。

屈辱と混乱。

自分の身体が、犯されて感じているという事実を受け入れられない。

なのに腰は勝手に動き、冴島の指を求めるように尻を突き出している。

冴島は指の動きを速めた。

ぐちゅ、ぐちゅと淫らな水音が地下牢に響き渡る。

ローションと腸液が混ざり合い、白い泡が穴の縁にこびりつく。

二本の指が出入りするたびに、ぬちゅ、ぬちゅと卑猥な音が鳴る。

「やっ……！　だめっ……なんか、来る……っ！」

瀬尾の性器が完全に勃起していた。

怒張したペニスが腹に張り付くように屹立し、びくびくと脈打っている。

亀頭は紫がかった赤に染まり、尿道口がぱくぱくと開閉している。

先端からは透明な先走り液が糸を引いて垂れ、太ももを伝って流れ落ちていく。

触れてもいないのに、前立腺の刺激だけでここまで反応している。

瀬尾の身体は、犯されることに最適化されているかのようなようだった。

「出そうなのか」

「知らない……っ！ 分かんない……っ、やめてっ……！」

瀬尾の腰がガクガクと震えている。
尻が勝手に動き、冴島の指を奥へ奥へと誘い込む。
穴がひくひくと指を締め付け、離さないとばかりに吸い付いてくる。
もう自分の身体を制御できていなかった。

「っ、あ、あ、あっ……！ やばっ……なんか、出るっ……！」

瀬尾の声が裏返る。
睾丸がぎゅっと持ち上がり、ペニスの根元が脈打つ。
射精の予兆。
触られてもいないのに、尻の奥を弄られるだけで限界を迎えようとしている。

冴島は指を奥まで押し込み、前立腺を強く圧迫した。
ぐりっ、と親指の腹で押し潰すように。
同時に指を広げ、内壁を引き伸ばす。

「ひぎいっ！！」

瀬尾が絶叫した。
全身が弓なりに反り返り、壁についた手が滑る。
白目を剥きかけ、口から涎が垂れる。

同時に、誰も触れていない性器から、白濁した液体が噴き出した。

どくっ、どくどくっ、どくっ。

脈打つリズムで噴射された精液が、コンクリートの床を汚していく。
一発、二発、三発、四発。
大量の白濁液が床に飛び散り、水たまりを作る。
ペニスがびくんびくんと跳ね、そのたびに新たな精液が吐き出される。

瀬尾の全身が痙攣し、膝から崩れ落ちた。
どさり、と床に倒れ込む。
背中が震え、肩が上下する。

腰がひくひくと震え続け、穴がぱくぱくと開閉している。

後孔から冴島の指が抜けると、ぬるりとした液体が溢れ出した。
ローションと腸液が混ざった透明な粘液が、太ももを伝って流れ落ちる。
拡張された穴は完全には閉じず、赤く腫れた粘膜が僅かに覗いている。

「あ……っ、あ……っ……」

放心した目で、自分が射精した痕を見つめている。
床に広がる白い水たまり。
まだびくびくと痙攣を続けるペニス。
理解が追いついていなかった。

尻を弄られただけで、イッてしまった。
誰にも触られていないのに、精液を撒き散らしてしまった。
それも、こんなに大量に。

「ほお」

鉄格子の向こうで、神谷が感心したように声を上げた。

「いい反応じゃねえか。これは上物だ」

冴島は指を引き抜いた。
ぬるりとした感触と共に、瀬尾の穴がひくひくと収縮する。

「検査は終わった」

「ああ、ご苦労さん」

神谷が煙草に火をつけた。

「明日からが本番だ。しっかり躰けるよ、冴島」

鉄格子の向こうの足音が遠ざかっていく。
冴島は床に崩れ落ちた瀬尾を見下ろした。

涙と汗にまみれた顔。

精液で汚れた太もも。
羞恥と屈辱で真っ赤に染まった頬。

「……殺して、やる……」

掠れた声で、瀬尾が呟いた。

「いつか……絶対……」

冴島は答えなかった。
ただ壁際に戻り、目を閉じた。

これが始まりに過ぎないことを、二人とも分かっていた。

第2話 飼い主の刻印

三日後。
冴島は神谷の前に立っていた。

「瀬尾を買い取りたい」

「お」

神谷が煙草の煙を吐き出し、にやりと笑った。

「気に入ったか、あの新入り」

「使える。俺の手元に置きたい」

「へえ」

神谷は机に肘をつき、冴島を見上げた。
値踏みするような目。

「お前、まだ信用されてねえぞ。分かってるな？」

「分かっている」

「裏切ったら、二人とも終わりだ」

「承知の上だ」

沈黙が落ちた。
神谷が煙草を灰皿に押し付ける。

「……いいだろう。ただし条件がある」

「なんだ」

「週に一度、お前の"成果"を見せてもらおう。あいつが使い物になってるかどうか、確認させる」

冴島は頷いた。

「分かった」

「あと、逃げられねえようにしとけ。首輪でもつけとけ」

神谷が引き出しから黒い革の輪を取り出した。
金属の留め具がついた、犬用のような首輪。

「これを使え。GPSつきだ。どこに逃げても追跡できる」

冴島はそれを受け取った。
手のひらに、革の重みを感じる。

これで、瀬尾は完全に自分のものになる。
組の監視下ではあるが、少なくとも他の連中に触られることはない。

それが、今できる最善だった。

監視付きアパートは、繁華街の外れにあった。
古びた外観。錆びた階段。
だが部屋の中は、意外にも清潔だった。

「ここがお前の新しい住处だ」

冴島がドアを開けると、瀬尾が恐る恐る中を覗き込んだ。
ワンルーム。ベッドが一つ。小さなキッチン。
地下牢に比べれば、天国のような環境。

「……本当に、俺を買ったのか」

「そう言っただろう」

「なんで」

瀬尾が冴島を睨む。

まだ目に力がある。三日間の地下牢生活で、かなり痩せたが。

「俺を助けるためか？ それとも、自分の性欲処理か？」

「どちらでもない」

冴島は部屋に入り、窓のカーテンを閉めた。

「お前は俺の所有物だ。それ以上でも以下でもない」

「……ふざけんな」

「ふざけていない」

冴島は振り返り、手に持っていた黒い革の輪を見せた。
瀬尾の顔色が変わる。

「なん、だよ……それ……」

「首輪だ。GPS内蔵。逃げても無駄だという証明」

「嘘だろ……」

瀬尾が後ずさった。

背中がドアにぶつかる。

「やめろ……そんなもの、つけさせるな……！」

「拒否権はない」

冴島が一步近づく。

瀬尾の呼吸が荒くなる。

「来るな……！」

「おとなしくしろ。暴れても無駄だ」

冴島は瀬尾の腕を掴み、壁に押し付けた。
抵抗する力は弱い。まともに食事を摂れていないせいだ。

「離せっ……！」

「黙れ」

低い声で命じると、瀬尾の動きが止まった。
地下牢での「検査」が、身体に刻み込まれているのだろう。
本能的に、逆らえなくなっている。

冴島は瀬尾の顎を掴み、上を向かせた。
白い首筋が露わになる。
そこに、黒い革の首輪を巻きつけた。

カチリ、と金属の留め具が鳴る。

「っ……」

瀬尾が息を呑んだ。
首に巻かれた革の感触。
冷たい金属の重み。
逃げられないという、物理的な証明。

「これで、お前は俺のものだ」

冴島は首輪の前面についた金属のリングに指をかけた。
くい、と引くと、瀬尾の身体が引き寄せられる。

「っ……！」

「分かったか。お前に逃げ場はない」

瀬尾の目に、涙が滲んだ。
だがすぐに唇を噛み締め、睨み返してくる。

「……いつか、殺してやる」

「好きにしろ」

冴島は手を離した。

瀬尾がよろめき、壁に背をつく。

「ルールを説明する」

「ルール？」

「俺がいない間、この部屋から出るな。俺の許可なく、誰とも話すな。俺の命令には絶対に従え」

「……奴隷じゃねえか」

「奴隷だ。それがお前の今の立場だ」

冴島は淡々と言った。

瀬尾が拳を握り締める。

だが何も言い返せない。

言い返したところで、状況は変わらないと分かっているから。

「……分かったよ」

絞り出すような声だった。

「従えばいいんだろ。従えば」

「ああ。それでいい」

冴島は瀬尾から目を逸らし、キッチンに向かった。

「腹が減っているだろう。何か作る」

「……は？」

「三日間、まともに食べていないはずだ」

瀬尾が呆気に取られた顔をしている。

首輪をつけた直後に、飯を作ると言い出す男。
理解が追いつかないのだろう。

冴島は構わず、冷蔵庫を開けた。
卵、ベーコン、パン。
最低限の食材は揃えてある。

「座って待っている」

「……お前、なんなんだよ」

「飯を作る。それだけだ」

フライパンを火にかける。
バターを落とし、卵を割り入れる。

瀬尾はしばらく立ち尽くしていたが、やがて観念したようにベッドの端に腰を下ろした。
首輪に手をやり、その感触を確かめている。

冴島はその姿を横目で見ながら、目玉焼きを皿に移した。

生き延びるためには、こうするしかない。
組の信頼を得ながら、脱出の機会を窺う。
そのためには、瀬尾を「使える駒」として維持する必要がある。

感情を挟む余地はない。
これは任務だ。
そう、自分に言い聞かせた。

食事の後、冴島は瀬尾をシャワーに入らせた。
三日分の汚れを落とさせ、清潔な服を着せる。

だが、それで終わりではなかった。

「立て」

シャワーから上がった瀬尾に、冴島は命じた。

濡れた髪から雫が落ちる。

薄手のTシャツと、借り物のスウェット。

首輪だけが、異質な存在感を放っている。

「……なんだよ」

「牝の時間だ」

瀬尾の顔が強張った。

「牝……？」

「お前は俺の所有物だ。所有物には、所有物としての振る舞いを覚えてもらう」

「待て、さっき飯食わせてくれたじゃねえか」

「それとこれは別だ」

冴島は瀬尾の首輪のリングに指をかけ、ぐいと引いた。

瀬尾がよろめき、冴島の胸に倒れ込む。

「っ……！」

「まず、基本を教える」

冴島は瀬尾を引き離し、その肩を押し下げた。

「膝をつけ」

「は……？」

「膝をつけと言った。俺の前で、跪け」

瀬尾の顔が羞恥と怒りで赤くなる。

「ふざけんな……！ 犬じゃねえんだぞ……！」

「犬以下だ。お前は俺の所有物だと言っただろう」

冴島は瀬尾の首輪を掴み、下へ押し下げた。
抵抗する力は弱い。
瀬尾の膝が、床についた。

「っ……くそ……！」

「いい子だ」

冴島は瀬尾の頭を見下ろした。
跪いた姿勢。上目遣いに睨んでくる目。
首輪をつけられ、膝をつかされた男。

屈辱に震える瀬尾の姿は、どこか扇情的だった。

「次だ。服を脱げ」

「……は？」

「聞こえなかったか。服を脱げ」

「待て……待ってくれ……」

瀬尾の声が震えている。
地下牢での「検査」を思い出しているのだろう。
あの時の屈辱と、身体が勝手に反応してしまった恐怖。

「早くしろ」

「っ……」

瀬尾は唇を噛み締め、震える手でTシャツの裾を掴んだ。
ゆっくりと、頭から脱ぐ。
白い肌が露わになる。
肋骨が浮いた、痩せた上半身。

「下も」

「……っ」

瀬尾がスウェットに手をかけた。
下着と一緒に、ずるりと下ろす。
まだ萎えた性器が、冴島の目の前に晒された。

「いい。そのまま跪いている」

冴島は瀬尾の周りをゆっくりと歩いた。
全裸で跪く男を、品定めするように見下ろす。

白い背中。
くびれた腰。
形のいい尻。
そして、首に巻かれた黒い革の首輪。

「綺麗な身体だ」

「……っ」

瀬尾が身を固くする。
冴島は瀬尾の背後に立ち、その肩に手を置いた。

「お前の身体は、俺のものだ。俺以外の誰にも触らせない」

「……だから、なんだよ」

「だから、お前の身体は俺が管理する」

冴島の手が、瀬尾の肩から首筋へと滑り下りた。
首輪の革に触れ、そこから鎖骨をなぞる。

「っ……やめ……」

「黙っている」

冴島の手が、瀬尾の胸へと下りていく。

薄い胸板。

その中央にある、小さな突起。

人差し指の腹で、乳首をくりと撫でた。

「ひっ……！」

瀬尾が声を上げた。

身体がびくりと跳ねる。

「感じるのか、ここ」

「感じっ……感じてねえ……！」

「嘘をつくな」

冴島は乳首を指で挟み、軽く捻った。

「あっ……！」

瀬尾の声が漏れる。

背中が仰け反り、腰が揺れる。

「敏感だな」

「違……っ、やめろ……！」

冴島は瀬尾の背後に密着した。

耳元に唇を寄せ、低く囁く。

「今日から、お前の身体は俺のものだ。俺の許可なく、勝手にイクことは許さない」

「は……？ なに、言って……」

「射精管理だ。お前がイっていいのは、俺が許可した時だけだ」

瀬尾が息を呑んだ。

冴島の手が、腹を撫で、下へと滑っていく。

「待っ……そこは……！」

「黙れ」

冴島の手が、瀬尾の性器を掴んだ。

冷たい指が、萎えた肉棒を包み込む。
瀬尾は息を詰めた。

「っ……！」

男の手が、自分の性器を握っている。
その事実だけで、全身の毛穴が粟立った。

「動くな」

冴島の手が、ゆっくりと上下し始めた。
皮を引き上げ、亀頭を露出させ、また戻す。
単調な、機械的な動き。
だがその手つきは妙に慣れていて、嫌でも感覚が鋭くなっていく。

「やめ……っ、触るな……！」

「黙っているとやった」

冴島は瀬尾の耳朶を甘噛みした。
柔らかい肉を歯で挟み、舌先で舐め上げる。
同時に、手の動きを速める。
しゅっ、しゅっと擦れる音が部屋に響く。

「あっ……ひっ……やめっ……！」

瀬尾の身体が震えている。
抵抗しようとしても、跪いた姿勢では力が入らない。
背後から密着した冴島の体温が、逃げ場を塞いでいる。

冴島の胸板が背中に押し付けられている。
服越しに感じる筋肉の硬さ。
男の体温。
そして、耳元で響く低い呼吸音。

萎えていた性器が、少しずつ硬さを増していく。
血流が集まり、ぴくりと脈打ち始める。
冴島の手の中で、肉棒が膨張していく。

「反応してきたな」

「違……っ、勝手に……！」

「勝手に？ お前の肉体は、もう俺の指を待ち望んでいる」

冴島は亀頭を親指の腹で撫でた。
敏感な先端を、くりくりと円を描くように刺激する。
尿道口に親指の先を押し当て、ぐりぐりと擦る。

「ひあっ……！　そこ、やめっ……！」

くちゅ、と先走り液が滲み出す。
透明な粘液が、冴島の指を濡らしていく。
量は少ないが、明らかに興奮している証拠だった。

「あひっ……！　やっ……！」

瀬尾の腰がびくりと跳ねた。
感じている。
男の手に握られ、擦られて、感じてしまっている。
認めたくない。認めたくないのに、身体が裏切る。

冴島はその液体を潤滑剤代わりに使い、手の動きを滑らかにした。
ぬちゅ、ぬちゅと淫らな音が響く。
先走り液でぬるぬるになった手のひらが、瀬尾の肉棒を包み込む。

瀬尾のペニスが、冴島の手の中で完全に勃起した。

さっきまで小さく縮こまっていたそれが、今は怒張して天を向いている。
亀頭は皮から完全に顔を出し、赤黒く腫れ上がっている。

「大きくなったな」

冴島が耳元で囁く。
低い声が、直接脳に響くようだ。

「うるさ……っ、あっ、あっ……！」

瀬尾の頭が後ろに仰け反る。
冴島の肩に後頭部が乗り、喉が露わになる。
首輪をつけた喉が、呼吸に合わせて上下する。

「気持ちいいか」

「気持ちよく、ねえ……っ！」

「その割には、腰が動いているぞ」

言われて、瀬尾が自分の身体を見下ろした。
腰が勝手に前後に揺れている。
冴島の手で、自分から突き出すように。

「違……っ、これは……！」

「抵抗する意志を、肉体が嘲笑っている。お前の口が何を言おうと、ここは俺を求めている」

冴島は瀬尾のペニスを強く握り込んだ。
根元から先端まで、ぎゅっと圧迫しながらしごき上げる。

「ひぎっ……！ あっ、あっ、あっ……！」

瀬尾の声が甘く濁る。
理性が快感に塗り替えられていく。
抵抗する意思が、身体の反応に負けていく。

冴島は手の動きを速めた。

シュコシュコと規則的なリズムで、瀬尾の肉棒を擦り上げる。
先走り液がたっぷりと溢れ、手のひらを濡らしていく。

「やっ……もう、やめっ……出ちゃ……！」

「出るのか？」

「出、る……！ 出ちゃう……！」

瀬尾の全身が震え始めた。
射精の予兆。
睾丸がきゅっと持ち上がり、ペニスがびくびくと脈打つ。
亀頭が更に膨らみ、尿道がひくひくと痙攣している。

あと少し。あと少しで達する。
瀬尾の意識がそこに集中した瞬間。

冴島は手を止めた。

「っ！？」

瀬尾が悲鳴のような声を上げた。
絶頂の直前で止められた身体が、混乱で震える。

ペニスはまだ限界まで勃起している。
先端から先走り液がとろとろと溢れ、糸を引いて床に落ちていく。
今にも射精しそうなのに、その一歩手前で止められた。

「な、なんで……！」

「言っただろう。俺の許可なくイくな、と」

「そんな……っ、ひどい……！」

瀬尾の腰が勝手に前後に揺れている。
空気を犯すように、虚しく腰を振る。
だが刺激がない。達することができない。

「ひどい？ お前は俺の所有物だ。所有物が勝手にイっていいわけがない」

冴島は瀬尾のペニスを軽く握ったまま、動きを止めている。
勃起したままの肉棒が、冴島の手の中で震えている。
脈打ち、痙攣し、射精を求めて蠢いている。

先端からは透明な液体がとろとろと溢れ、床に滴り落ちていく。
ぽたり、ぽたりと、淫らな水音が響く。

「お願い……っ、出させて……！」

「駄目だ」

「なんで……っ！」

「まだ許可していないからだ」

冴島は瀬尾のペニスを離した。
支えを失った肉棒が、びくんと跳ねる。
勃起したまま、宙に浮いている。
誰にも触れられず、達することもできず、ただ震えている。

「あ……っ、やだ……っ、出したい……！」

瀬尾の目から涙が零れた。
屈辱ではない。純粋な焦燥。
身体が求めているのに、与えられない苦しみ。

瀬尾が自分で触ろうと手を伸ばした。
だが冴島がその手首を掴み、背中で交差させる。

「触るな」

「でも……！」

「俺の許可なく触るな。それがルールだ」

両手を封じられ、瀬尾は身動きが取れなくなった。

跪いたまま、勃起したペニスを晒して、何もできない。
先走り液が止まらず、太ももを伝って流れ落ちていく。

瀬尾が涙目で冴島を見上げる。
跪いたまま、勃起したペニスを晒して、懇願するような目。
さっきまでの反抗的な態度は、どこにもなかった。

「お願い……出させてくれ……」

「……」

「もう、我慢できない……お願いだから……」

声が震えている。
プライドも何もかもかなぐり捨てて、ただ射精を懇願している。

冴島は瀬尾を見下ろした。
涙と先走り液で顔と股間を濡らした、哀れな姿。
プライドの高かった男が、射精をねだっている。
首輪をつけられ、跪かされ、勃起したペニスを晒して。

「いいだろう」

冴島は再び瀬尾のペニスを握った。
今度は力強く、速く、激しく。
シュコシュコシュコと音を立てて、肉棒を擦り上げる。

さっきまで焦らされていた分、刺激が何倍にも増幅される。
敏感になった肉棒が、冴島の手の中で痙攣する。

「あひっ……！ あっ、あっ、あっ……！」

瀬尾の身体が痙攣し始める。
さっき寸止めされた分、すぐに限界が近づいてくる。
睪丸が縮み上がり、尿道がひくひくと脈打つ。

「イけ」

冴島が命じた。
耳元で、低く、はっきりと。

「イっていい。全部出せ」

「あっ、あっ、イク……っ、イクッ……！」

瀬尾の全身が弓なりに反った。
背中が仰け反り、首輪をつけた喉が露わになる。
同時に、ペニスから白濁した液体が噴き出した。

びゅるっ、びゅるるっ、ぶるっ。

大量の精液が床に飛び散る。
一発目は勢いよく飛び、二メートル先まで届いた。
二発目、三発目と続き、床に白い水たまりを作っていく。

冴島の手に、瀬尾の精液がべったりとこびりつく。
熱い液体が指の間から溢れ、手首まで垂れていく。
溜まりに溜まった分が、一気に放出されていく。

「あ……っ、あ……っ……！」

瀬尾がガクガクと震えながら、射精を続けている。
白い飛沫が床を汚し、冴島の手を伝って滴り落ちる。
普段の何倍もの量が、途切れることなく吐き出されていく。

びゅく、びゅく、と最後一滴まで絞り出される。
ペニスがびくびくと痙攣し、尿道から残りの精液が押し出される。

やがて射精が収まり、瀬尾の身体から力が抜けた。
膝から崩れ落ちそうになるのを、冴島が支える。

「あ……あ……」

放心した目。
全身が汗で濡れ、精液の匂いが部屋に充満している。
首輪をつけた首が、力なく項垂れる。

冴島は自分の手についた精液を見下ろした。
白く濁った、生温かい液体。
瀬尾の身体から出たもの。

「……覚えておけ」

冴島は瀬尾の顎を掴み、上を向かせた。

「お前がイっていいのは、俺が許可した時だけだ。勝手にイったら、罰を与える」

「……っ」

「分かったか」

瀬尾は何も答えなかった。
ただ、涙を流しながら、冴島を睨んでいる。
だがその目には、もう反抗の光はなかった。

屈辱。
絶望。
そして、ほんの僅かな、従属への傾き。

冴島はそれを確認し、手を離れた。

「今日はここまでだ。休め」

瀬尾が床に崩れ落ちる。
精液と汗にまみれた身体。
首に巻かれた黒い首輪。

冴島はその姿を一瞥し、バスルームへ向かった。
手についた精液を洗い流しながら、考える。

これでいい。
これが、今できる最善だ。
組の信頼を得るために、瀬尾を躰ける。
そして機会を窺い、二人で脱出する。

だが、本当にそれだけか？

冴島は鏡に映った自分の顔を見た。
無表情。冷徹。感情を殺した顔。

その奥に、何かが蠢いている気がした。
認めたくない、暗い何かが。

冴島は目を逸らし、水を止めた。

考えるな。
感じるな。
これは任務だ。

そう言い聞かせて、バスルームを出た。

第3話 膝をつけ

一週間が経った。

監視付きアパートでの生活は、奇妙な安定を見せていた。

冴島は毎日、決まった時間に食事を作った。

瀬尾は最初こそ警戒していたが、今は黙って食べるようになっていた。

首輪をつけたまま、テーブルの向かいに座り、無言で箸を動かす。

「……なあ」

ある夜、瀬尾が口を開いた。

「お前、本当に刑事なのか」

「そう言っただろう」

「じゃあ、なんで俺を助けない」

冴島は箸を止めた。

瀬尾の目が、真っ直ぐにこちらを見ている。

「助けられると思うか、この状況で」

「分かんねえよ。でも、お前が刑事なら……」

「俺は裏切られた。上司に売られた。今の俺に、警察の後ろ盾はない」

瀬尾が息を呑んだ。

「……マジかよ」

「だから、今は耐えるしかない。機会を待つ」

「機会って、いつだよ」

「分からない」

冴島は再び箸を動かした。

瀬尾はしばらく黙っていたが、やがて小さく呟いた。

「……お前も、囚われてるんだな」

冴島は答えなかった。

翌日、神谷から連絡が入った。

「明日、見せてもらうぞ。お前の"成果"を」

電話越しの声は、楽しそうだった。

「どういう形で見せればいい」

「そうだな……あいつに、お前のモノを喰えさせる。それを撮影して送れ」

冴島は眉一つ動かさなかった。

「分かった」

「ちゃんと奥まで入れろよ。形だけじゃ意味がねえ」

電話が切れた。

冴島はスマートフォンを見つめ、それからソファに座っている瀬尾を見た。

瀬尾は本を読んでいた。

冴島が買い与えた、古い文庫本。

退屈を紛らわせるために、いくつか与えてある。

「瀬尾」

「……なんだよ」

本から目を上げない。